

# サロンの文芸活動(V)

—中宮定子サロンの議題—物語受容—

目加田 さくを

## (I)

中宮定子サロンの声誉を天下に鳴りひびかせたのは、定子及び清少納言、宰相の君等の漢才による、機智溢れる文芸的行動であった。

枕草子(岸上氏校訂三卷本枕草子による)からあげよう。

①于定國がことにこそ待るなれ……その御道もかしこからざめり

清少 実父于公高門(漢書・蒙求)

②湘中が家の人のもどかしさも……(列仙伝)

③五千人のうちには入らせたまはぬやうあらじ……(法華経)

④梨子の花……楊貴妃の帝の御使にあひて泣きける顔に似せて梨花

一枝春雨を帯びたりなどいひたるは……(白氏文集)

⑤桐の木の花……唐土にことごとしき名つきたる鳥のえりてこれに

のみるらん・いみじう心ことなり(詩経 鄭玄注)

⑥五月に雨の声をまなぶらんもあはれなり(方干詩)

⑦山鳥友を恋ひてなくに鏡を見すればなぐさむらん心わかういとあ

はれなり(事文類聚後集)

⑧鶴は……鳴く声雲居まで聞ゆる(詩経)

サロンの文芸活動(V) —中宮定子サロンの議題—物語受容—

⑨岸の額に生ふらんも……(和漢朗詠集)

⑩翠翁紅とも詩に作りたるにこそ(和漢朗詠集)

⑪斧の柄も朽ちぬべきなめり(述異記)

⑫蘭省花時錦帳下とかきて末はいかに——齊信

草の庵を誰かたづねむ(廬山雨夜草庵中)——清少(白氏文集)

⑬瓦に松はありつや(白氏文集)

⑭ななばかしくしたりけんは……清少

別れは知りたりや——中宮(白氏文集)

⑮秋の月の心を見待るなり(白氏文集)

⑯九品蓮台の間には下品といふとも 和漢朗詠集

⑰昔物語も……鶉の声にもよほされてなん……御返りに「いと夜深く

待りける鳥の声は孟嘗君のにや」(史記)

⑱御簾をもたげてそよるとさし入るるは呉竹なりけり「おいこの君

にこそ」と……(晋書)

⑲殿上より梅のみな散りたる枝を「これいかが」といひたるに「早

く落ちにけり」といらへたればその詩を誦じて……(和漢朗詠集)

⑳すこし春ある心地こそすれ——公任

空寒み花にまがへて散る雪に——清少

(白氏文集) 三時雲冷多飛雪。二月山寒少春

⑲餅飲へいこん 一包……行飲

冷淡れいたんなりと……清少

⑳雨のうちはへ降るころ……褥しとねさし出でたるを……「かかる雨に

のほり待らば足がたつきていと不便にきたなくなり待りなん」と

いへば「などせんそく料にこそはならめ」……

洗足・氈褥

㉑「明日はいかなることをか」……「人間の四月をこそは」といら

へたまへるがみしうをかしきこそ……(白氏文集)

㉒露は別れの涙なるべしといふことを頭中將のうちいだしたまへれ

ば……「急ぎける七夕かな」といふをいまじうねたがりて(普

家文章)

㉓「……三十の期におよばずはいかが」といひたれば返事に「その

期は過ぎたまひにたらん。朱買臣が妻を教へけん年にはしも」と

書きてやりしをまたねたがりて……(古注蒙求)

㉔雪のいと高う降りたるを……「少納言よ、香炉峯の雪いかなら

ん」と仰せらるれば、御格子をあげさせて御簾を高くあげたれ

ば……(白氏文集)

という華麗さである。

前述(二三号) (1)のように、定子母方高階氏の祖は、天武帝太子高市皇子の嫡男長屋王である。正二位左大臣長屋王は佐保の自邸を作寶樓と称し、しばしば詩譚を催した。当代きつての大詩人であり、かつ詩壇のバトロンであった。新羅客を招いての国際的な詩譚は、

立場上、外交の場でもあった。日本人で、全唐詩に詩を採取されたのは、長屋王一人である。(但し唐朝に帰化し、朝衡と改名、唐に歿した阿倍仲麻呂の一首があるが) 中国本土にも通用する詩人である。彼は中国に繡袈裟を施入した。

全唐詩(中華書局本) 卷七百三十一

長屋

長屋。日本国相国也。詩一首。

繡袈裟衣縁明皇時。長屋嘗準于袈裟。繡係於衣縁。來施中華。真公因泛海至彼國傳法焉。

山川異域。風月同天。寄諸佛子。共結來縁。

長屋王の詩宴活動は、その成果を懐風藻六十四首中十九首をしめる様相で歴然と残している。彼の詩譚に寄せる此の熱意は、唐土の帝王詩譚・公主詩譚への強い憧憬、志向にあった。遠祖長屋王詩譚の栄光は、漢文芸作家圈の名門高階家の子孫に語り継がれ、此の公主詩譚への憧憬、志向は、高階門流に流れていく。更に、前述のように、此の高階門流に、在原業平、恬子の和歌の血流が混入してきたのである。

拙著「東西女流文芸サロン」で詳述したように、後宮、内親王主催の歌合は、唐の公主詩譚にならう本朝版サロンに外ならぬ。

## (II)

後宮、内親王歌合をみると、歌合の極く初期に位置するものが、一「仁和元三年夏」民部卿行平歌合(萩谷氏平安朝歌合大成二巻)に次ぐ二「仁和三年八月廿六日以前」中将御息所歌合である。(前述のように中将御息所は、或は業平女であるかもしれぬ。) 残存

資料（古今集・素性集）によれば、歌人は藤原後藤、素性であった。五〔寛平五年九月以前〕皇大夫人班子女王歌合の歌人は、紀友則源当純 素性 藤原興風 伊勢 在原元方 源宗子 紀貫之 紀有岑 在原棟梁 大江千里 藤原菅根 壬生忠岑 坂上是則 小野美材 藤原敏行 菅野忠臣 凡河内躬恒 である。六寛平八年六月以前后宮胤子歌合では、歌人当純元方 友則 貫之 躬という風に、当代有数の歌人を左右にわけて、競いあわせた歌合であった。

この場合、主人公の後宮は歌を出さない。唐代公主詩譚の場合と同様である。たとえば安樂公主山莊詩宴では、「唐詩紀事」によると、李適、劉憲、蕭至忠、李迥秀、岑義、李义、馬懷素、李嶠、沈佺期、韋元旦 等の詩人が詩を奉っている。

又、当然、歌合ではなく、集って歌を詠みあう歌合が、しばしばもたれるにいたる。月につけ時鳥につけ、四季それぞれの風情を、又思いがけぬ事態を面白くとりなして、サロンの女主人公から「歌詠め」と命ぜられる場合、又、おのづから興趣に惹かれて、サロンのメムバー女房達が詠みあう場合等々。この場合は主人公の貴婦人も歌を詠む。日本最初の本格的貴婦人サロン・中国流にいえば公主、歌譚の様相を伝えてくれるのが、大齋院前御集・大齋院御集である。六日あめいみしうふる もりてれいはありともしらぬ御ふねを

おまへちかうひきよせて もるところにすゑたるをこらんして  
○かつきわひなけなのうらにみをすてしあまふねとこそいふへかり  
けれ

とのたまはせて 「ひとくつけよ」とのたまはずれば こゝろ  
くにいふ 進

サロンの文芸活動(V) — 中宮定子サロンの議題 物語受容 —

上句。○おきところしらざりつれとこれにより

上句。○うらみつ、よをうみわたるわか身をは

上句。○たちまさるなみのたよりによるみれば

左門

さい将

「みなひとつつ、よむへし」とおほせらるれば  
○あまをふねよせつとならばありもへてなそやうきよにこきはなれ

院女房  
○たのめつ、なみこす人のあまたあれはた、みのうらにふねさへそ

よる  
○あまふねのたよりならぬにさはりおほみあしのみきはをわけてこ

そくれ  
○よにふりてしつみをりけるあまふねをおほくつなてのひきはいて

つる  
○としをへてしつめるふねをしらなみのか、るたよりにうちよする

かな  
兵ゑおほむゆかりのもとちかければなるへし

○おとにのみき、わたりつるあまふねをうらはまゆふによするしら

なみ  
○いかなれはしつめるふねのこよひよりとこのうらまでこきよりつ

らむ  
雨もりする佗しい齋院が忽ち、楽しいサロンと化した。枕草子が

礼讚し、紫式部日記が、やつかみで悪口をいう大齋院サロンは、実

に華やかな活動を、五十数年にわたつて展開した。齋院を訪ねる歌

人殿上人との連歌も十九首に及んでいる。大齋院御集（桂宮本業書

二ヨル）

中将、中つかさ、あきのねさめのあはれこと、ふるめかしうあらためてきたむるに、中将、春のあけほのなんまさるとあらかひてのころ、中将山さとにこもりゐたるに、中務いひやる

○やまさとにありあけの空をなかもても猶やしられぬ秋のあはれは

返

中将

○あきのよのとやまのさとのねさめにもかすみすきにし空そ恋しきこれを見ると、当時齋院では、春秋優劣論は、すでに陳腐なごととされてきた。が矢張り、本気で、姉妹女房が争っている。それで歌を詠みあう。大齋院サロンはどうも、また歌にのみこだわり、明暮ているようである。

### III

中宮定子サロンになると、その話題、議題は、非常に広汎になってくる。文芸、音楽、宗教、舞踊、服飾、遊技、闘技、年中行事、祭祀、室内装飾、車輿、調度、自然美、心情美、言語、等々、じつに多種多様である。

文芸も、漢文芸、和歌、物語、日記と多岐にわたる。定子サロンでは、中宮の命によって歌を詠みあうのは日常である——「……物のをりなど人のよみ待らんにも「よめ」など仰せらればえさぶらふまじき心地なんし待る……」——、歌合といったようなもので満足するでい、のサロンではなかった。歌語りはもとより、和歌にかかわる故事逸事を、中宮定子自身が口にしては、サロンの女房教育をしたのである。(註②) 拙著「東西女流文芸サロン」笠間書院111—176頁参照) さて、今回は、物語についてみよう。それが曾孫祿子内親王サロ

ンの「物語合」へと展開していくからである。以下枕草子によって見ていく。枕草子は、いわば中宮定子サロンの優等生清少納言の記、つまり、その記事は、定子サロンの議題と決論——清少納言よりの——と見なせるからである。

先ず、物語論議の様子を次の條にみよう。

### 七六

暮れぬればまゐりぬ。御前に人々いとおほく、上人などさぶらひて、物語のよきあしきにくき所ななどをぞ定め言ひそしる。涼、仲忠などが事、御前にも劣り優りたるほど仰せられける。「まづこれはいかに。とくことわれ。仲忠が童生ひのあやしさをせちに仰せらるるぞ」などいへば、「なにか。琴なども天人の下るばかりひき出で、いとわるき人なり。帝の御むすめやは得たる」といへば、仲忠が方人ども所を得て、「さればよ」など言ふに、「この事どもよりは、昼、齊信がまゐりたりつるを見ましかば、いかにめでまどはましとこそ覚えつれ」と仰せらるるに、「さて、まことにつねよりもあらまほしうこそ」など言ふ。「まづその事をこそは啓せんと思ひてまゐりつるに、物語の事にまぎれて」とて、ありつる事ども聞えさすれば、「誰も見つれど、いとかう、縫ひたる糸・針目までやは見とほしつる」とて笑ふ。「西の京といふ所のあはれなりつる事、もろともに見る人のあらましかばとん覚えつる。垣などもみな古りて、苔生ひてなん」などかたりつれば、宰相の君の、「瓦に松はありつや」といらへたるに、いみじうめでて、「西のかた、都門を去れることいくばくの地ぞ」と口ずさみつること」など、かしがましきまで言ひしこそをかしかりしか。

清少納言が御前に伺候すると、物語論議に花が咲いている。殿上人らも一坐にあり、宇津保物語、それも涼、仲忠優劣論に話が移つて、涼方、仲忠方が、丁々発止とやりあつていた。この仲忠・涼優劣論争は、大納言公任集に

ゑんゆう□の御ときにや、うつほのすゝし、なかつた、といつれまされりとろしけるに、しのなはしはすしか方にやありけん、女一宮はなかつた、か方におはしけるにや、いつれをいゝなどあるに、物ないひそとおほせられければ、とも角もいはておはしけるを、いひにおこせ給ふければ

五三〇

奥津波吹上のはまに家ゐして独すゝしと思ふへしやはとあるから、円融帝の時代(969—984)に、すでに行われていた様子が推察される。枕草子同段を長徳二年996二月廿余日とみれば、二十年来、サロンの恰好の議題となつていたわけである。

④中宮は涼方で、本氣になつて、仲忠が幼少時代の貧しいうつほぐらしを、痛切に指摘し、マイナス点をつける。

⑤清少納言は仲忠方で、敵方の涼を、「琴なども、せいぜい天人が舞い降りるぐらゐの程度上手に弾いて、つまらんです。仲忠みたいに、観感のあまり、皇女を賜つたでしようか」——君主専制政治下の日本では、この一事はオールマイティの力を發揮し、相手方を完封する。

⑥中宮は、形勢不利とみてとるや、論議中止、斉信の讚美へ話を移行させる。

⑦清少納言も、それに乗り、すっかり斉信礼讃で終る。

サロンの文芸活動(V)——中宮定子サロンの議題——物語受容——

しかし、中宮も負けてはいない。執拗に攻勢に出る。

七九

さて、その左衛門の陣まゐなどに行きて後のち、里に出でてしばしあるほどに、「とくまありね」などある仰おほせ言の端はに、「左衛門の陣へ行きしうしろなんつねに思おもひしめし出でらるる。いかでか、さつれなくうち古りてありしならん。いみじうめでたからんとこそ思ひたりしか」など仰せられたる御返しに、かしこまりのよし申して、私わたくしには、「いかでかはめでたしと思ひ待らざらん。御前みまへにも、『なかなるをとめ』とは御覽みまへじおはしましけんとなん思ひたまへし」ときこえさせれば、たちかへり、「いみじく思へるなる仲忠が面おもておせなる事はいかで啓したるぞ。ただ今宵よのうちによろづのことを捨ててまゐるれ。さらすはいみじうにくませたまはん」となん仰せごとあれば、「よろしからんにてだにゆゆし。まいて『いみじう』とある文字もじには、命いのちも身もさながら捨ててなん」とてまゐりにき。

⑧うつかり、清少納言が、涼の名演奏で天人が舞い降りた際の歌を引用すると、

⑨中宮はすかさず、仲忠方にとっては不利になる歌——『涼、弥行が大曲の音の出づる限り仕うまつる。天人降りて舞ふ』(宇津保吹上下)時に、その天人を讚えた歌『朝ほらけほのかに見ればあかぬかな中なる乙女しばしとめなん』——を採用するとは何事か、今宵の中に伺候して弁明せよ、と攻めたてる——(一日も早く清少を手許に呼びよせたい本心だが)——のである。

二〇六……郭公をいとなめううたふを聞くにぞ心憂き……仲忠が童生ひ言ひおとすと、ほととぎす、鶯に劣ると言ふ人こそいとつ



うらやみの中将さい相にこうませてかたみのきぬなとこひたるそに  
ものまうけたるそにくき

かたの、少將  
かはほりのみやむもれ木人めかた野、少將

堀本 高底志・壹・山・鈴・紅・時・無震・京・圖(以下同・抄畧)

物語はすみよしうつほのるいとのおつり(無との移辰・京・圖殿つ  
くり)くにうつり(時くにうつり)はにくし(時「はにくし」と)  
を君月侍をんな(壹・時月侍をんな山月待女鈴・無月まつおんな紅  
月まつをんな宸・京・圖月まつ女こまのは(京ナシ)くひもの(壹  
くひ物山くありの鈴らひもの)まうくる所(宸・京・圖そ)にくき  
むもれ木かはほりの宮(鈴かはほりのみや時かはほりの宮人めかた  
の、小將)

第二百七十一段

成信中将は.....月のあかき.....はかり.....と

をく物おもひやられすきにし事.....うかりしもうれしかりしもお  
ほう.....

かしとおほえしもた、いまのやうにおほゆるおり.....はあるこまの、

物・語.....はなにはかりおかしき事.....もなくことはもふるめき見所  
ものかたり.....

ころ.....おほからねと月にむかしをおもひ出.....てむしはみたるかはほ  
もなけれ.....

りとり出.....てもとこしこまにと.....ひてたて.....つねた  
いて.....るかとあはれなるな

サロンの文芸活動(M) — 中宮定子サロンの議題 — 物語受容 —

り：かたの、少將.....おちくほの少將などは.....おかしよへを  
六條にきたる.....おかし

と、ひの夜もありしかはこそそれもおかしけれ.....あしあらひたるはに  
.....

くしきたなかりけり.....かたのはむまのむくるにもおかしそれもよへ  
.....

おと、ひの夜ありしかはこそおかしかりけれ  
.....

第二百六十二段

人.....おとこもをんなもよろつの事.....まさりてわるき.....より  
.....

物.....おとこも女も.....ことはもしあやくつかひたるこそ  
.....

つ.....よりまさりてわろけ.....あれた、もし一にあやくもあてにもい  
.....

やしくも.....なるはいかなるにかあらんその事.....させんとすと  
.....

い.....はんとする.....といふを.....とすといふこと.....ともしを  
.....

うしなひてた、いはんするさとへいてんするなどいへはやかていと  
.....

わろし.....まして文.....をかきてはいふへきにもあらず物.....語.....  
.....

な.....こそあしうかきなしつれはいふかひなくつくり人さへいとをし  
.....

けれなをす定.....本のま、なとかきつたるいとくちおし  
.....

第百十九段

繪かきに書おてをとりす物なてしこさうふさくら山かき吹もののかたりにめ  
てたしといひをきたる男おとこ女おとこのかたち

第四百十三段

つれなくさむ物もの物語ものこすくろく物かたりみつよつはかり  
なるちこの物ものおかしういふ又またいとちいさきちこのものかたりし  
たるかゑたかへなといふ事わざしたるくた物もの

第二百五十四段

うれしき物見またみぬ物語かたりのおほかる又またひとつをみていみしうゆ  
かしう上のみおほゆる物語かたりの二の見見つけたるさ心おとりする  
やうにもありかし

「物語のよきあしきにくき所などをぞ定めいひそしる」七六段  
前掲とは、つまり、「物語の出来不出来、気にくわぬ点などをまあ、  
皆で論じあつて決めたり、悪口をいったりする」というのである。

それは次の様な角度からであらう。

- ① 物語の筋、主題、構成の巧拙。はこびのテンポの遅速。全体として作品の魅力の多少。
- ② 事件、人物造形の如何、品位のわるさ、不快さ、おもしろさ、めたさ。
- ③ 言語表現の如何。

④ あはれなるシーンの有無。

⑤ 心理描写の巧拙。

具体的にあたつてみよう。

○こまの物語は、**①**なにはかりおかしき事もなく、**③**ことはもふるめき**④**見所おほからねど**⑤**月にむかしを思ひいでて虫はみたるかはほりとり出て、もとみしこまに、といひてたつねたるかあはれなるなり 二百七十一段

○**⑤**かたの少将もどきたるおちくほの少将などはをかし 全段  
このかたの少将とは、落窪物語に、交野の少将と仇名される貴公子弁少将を、少納言が姫君に媒しようと言つたのを聞いて、少将が「…かたの少将をかたちよしとほめきかせてまつるにこそ見まうくなりぬれ。さもえいらへ給はで……こなたを見おこせ給て、心もとなげに口づくろひし給へるかな。待らざらましかば、かひある御いらへどもあらまし、文だにもてきそめなばかぎりぞ。彼はいとあやしき人のくせにて文一くだり遺りつるが外る、やうなければ人の妻、みかどの御妻ももたるぞかし……そがうちに、わたくしものと聞ゆなればいとおぼえ異におはするは」といとあいなく、ものしげにおぼしてのたまへば……と、やきもちをやく條である。○こ

の少將の、弁少將にもやすライヴァル意識と嫉妬心の表白の様子が、「をかし」、よくかけている、と清少納言が褒めるのである。

これは落窪少將を好き、というのではない、人物造形の巧みさを指摘するものである。

「物語」はと、正面きって論じる段を見よう。

「物語は 住吉 宇津保」までは諸本異文がない。後文を照合すると、「宇津保のるい、とのうつり」とある能本が、原本に近いかと思われ、又、三本・堺本の「くにゆづりはにくし」も、原本にあつたか、と思う。

さて、ここに竹取物語・落窪物語を挙げない事に注目しよう。それは何故であろうか。それについては、先ず、住吉が第一に採りあげられた事から、考察するのが一方法である。

日本最初の長編小説、宇津保物語をさしおいて、「物語は住吉うつほ」と、住吉物語が、最初に挙げられたのは、なぜか。

住吉物語にちかに当るより外に道はない。しかし、住吉物語は、古本は既に亡び、今本住吉物語とは、いざさか異なるようである。

風葉和歌集（序によれば文永八年1271）所載の住吉物語の歌は七首、この中、今本住吉物語がもつのは五首。歌と詞書から推察すると、古本と今本は、大筋においては似ていたとみなすべきであろう。即ち、

○住吉物語 ○風葉和歌集 七首（中野氏校本）

すみのえに待けるを関白にいさなはれて都にのほりけるに霧のたえまより松の木すゑはかりはるかにみえければ

すみよしの関白北方

サロンの文芸活動(V) — 中宮定子サロンの議題—物語受答—

(a) 覇旅588はかなくてわかすみなれし住のえの松の梢のかくれぬる哉

(すみよしの松の梢のいかならむとほざかるまで袖のつゆけき)

(住吉物語 友朋堂文庫)

めのとのなくなりたる四十九日のわさし待けるにうちきつかはすとてかきつけたる

すみよしの関白北方

(b) 哀傷678から衣しての山路を尋つ、われはく、みし袖にかさねよ女のもとにつかはしける

すみよしの関白

(c) 恋1803世と、もにけふり絶せぬふしのねのしたの思ひやわか身なるらむ

按察大納言三君

(d) 同804ふしのねのけふりときけはたのまれすうはの空にや立のほるらん

しのひてすみよしに侍ころまつかせをききて

住よし関白北方

(e) 雑三三〇 尋ねへき人もなきさの住の江にたれまつ風のたえす

ふくらん

関白北方しのひてゐてはへりける舟のうちにてよめる

おなしあま

(f) 同三三三 住よしのあまとなりてはすきしかとかはかり袖をぬらしや

はせし

うきこと、もありて父の大納言のもとをしのひていつとてかきつけ、る

住吉関白北方

(g) 同窓 我身こそなかれもゆかめ水くきの跡はと、めんかたみともよ

風葉和歌集が採択した出典の住吉物語を、一応、枕草子のいう住吉物語（古本住吉物語）と見なせば、古本住吉には、関白・関白北方・按察大納言三の君、あまの人物が登場し、北方は、何らかの事情で京の邸からひそかにあまにつれ出されて住吉の浜に身をかくした時期がある。それを男君（後に関白となる）に見出され、京に伴われ、北方におさまった。按察大納言の三の君と交渉があった。

今本住吉物語の梗概は、

中納言（後に按察大納言）は宮腹の御女北方に、「光る程の」姫君、諸大夫の女北方に中君、三君がある。姫君の母北方は、姫の内裏入内を切望し、遺言して他界。継母北方は姫の入内を事ある毎に妨害。右大臣の御子四位少将が、筑前を媒に姫に文を送るが、姫も侍従も内裏参りを念願している為、とりあわない。継母が聞いて筑前を手なづけ、三君を姫と詐って少将と結婚させる。この時の贈答一首が風葉和歌集(c) 詞書・歌と一致する。少将は詐りに気づく。正月十日、中君に誘われ、姫、三君が嵯峨野に遊ぶ。少将は姫君を見て恋着する。侍従の母死去、姫君が桂一襲を布施に贈る歌、「から衣……」は風葉和歌集(b) 詞書・歌と一致する。中納言は姫を五節に出だし立てようとする。継母は奸計をめぐらし、六角堂の別当法師が姫の許に通っていると告げ、中納言に内裏参りを断念させる。中納言は、内大臣の御子、宰相の左兵衛督との縁談を決め、故母北方の三条堀

川の邸を新居にと設営する。又継母はねたんで、むくつけ女と共謀し、七十ばかりの主計助、ただれ目翁に盗ませようと計る。しきぶが侍従にしらせる。姫は、父中納言に告げて、今回は遁れても、又継母がどのような奸計を企てるかわからぬ。人里はなれた野山に隠れ尼になろうと歎く。侍従が才覚をめぐらし、故母宮の乳母が、母宮の死後尼になって住吉に住んでいるを思いつき、尼君を招く。尼君の計らいで、姫は櫛篁と琴だけをもって父の邸をのがれ出る。

九月廿日あまり、在明月の下、淀に到着、淀川を下る。船中で尼君が詠む歌「住吉のあまとなりても……」は風葉集(f) 詞書・歌一致。住吉の浜で暮す。父中納言の愁歎を思いやり、尼君のもとの小童を使に、文（文の奥に長歌あり）をそれとなく送る。右大臣は関白に少将は三位中将となり、姫の行方を探しつづけ神佛に祈る。初瀬に七日参籠し、夢に姫をみる。姫が「わたつ海の底ともしらす侘ぬれは住吉と社あまはいひけれ」と詠むをみて夢はさめる。中将は住吉の浜をたづねる。姫が琴をひき歌う歌は(e) 詞書・歌とも風葉集と一致、中将は姫を京に伴い帰り、北方とする。姫の道中詠の條は、今本住吉と風葉集(a) 詞書とはほぼ一致するが、歌はことなる。風葉の詞書、「霧のたえまより」が今本「一むらのたえまより」となるか。「一むらのたえまは意味をなさぬ。古本の「霧のたえまより」あたりから本文が乱れて、今本の体裁となったか、と思う。右大臣は関白、中将は中納言右大将、中納言は按察大納言に。按察大納言に腰ゆひの役を頼む。大納言に、「なめらかなる小桂」をかづける。帰邸して大納言は、その小桂が、姫に「きせはじめし時の桂」としり、大将邸に赴く。大納言は北方（姫君）と対面。一切の事情判明。大納

言恥ちて、一人、故北方の三条堀川の邸へ移る。大将は伯母の対の御方を送り、北方とする。大将閑白となり若君元服し、三位中将、姫君は女御に。継母は没落し死亡。むくつけ女は放浪。中君は夫に去られるが、中君、三君ともに姫君にひきとられる。しきぶは閑白家で重用される。栄達の生活で暮。

つまり、五首の歌、詞書が、今本のそれと全く一致する。(a)も、前述のように、詞書(古本)が、今本は乱れて変化したと推察される。さて、落窪物語に比べて、古本住吉物語は

(1)構成の巧みさ。筋がより変化にとみ、スリルがあり、場所の変化がある。たゞれ目の翁にあわやという所で、式部の密告で危機を知り、住吉の尼君を招いて脱出相談、次々と難関突破の快感、テンポが早い。

(2)落窪の汚穢趣味がないこと

(イ)典薬助が遣戸をあけかねて夜更けに、ひり、かけして去った。

(ロ)老典薬助が姫に寄り添うが、辛うじて身を守る一悪趣味、とサロンのメモバーにはうけとられる。

(ハ)少将が帯刀を伴に通う途中、雑色らに見咎められて「屎のいと多かる上に屈りぬ」この條は甚だ興味をもって詳しく語られる。

○しかし、これ亦、レディの趣味にあわぬ

(3)落窪の父中納言は北方に遠慮しすぎて姫に愛情が乏しい。住吉は北方に気兼ねしつつも、姫に愛情深い。最後の別れともしらず立ちよつて姫に「おやの思ふばかり子は思はぬ事の心うさよ。いか

サロンの文芸活動(V) — 中宮定子サロンの議題 — 物語受容 —

ばかりにか哀と思ひ待る。頭の髪を筋ごとにとありとも、いなぶべき身かは」という。

(4)自然描写が美しい。あはれ(情趣歌)の深さ。淀川下りの場、住吉の浜の景色、少将が姫君を尋ねる條、「夕なみ千鳥あはれに鳴わたり、岸の松風物さびしき空にたぐひて琴の音ほのかに聞こえけり……」など、平家物語小督の條を思わせる。

(五)住吉物語に比べ、落窪は、大味であり、楽観的。諧諷を弄し、楽しんでかかっている。「まさかそんな」とサロンの論客達は思う。同時に、竹取物語も、小さい姫君向きのお伽話、と論客達は一笑に附したものと想われる。げんに、清少納言達より先輩の道綱母も、世中におほかるふるものがたりのほしなどを見れば、世におほかるそらごとだにあり……(世間ざらにある陳腐な物語なんぞ、みるとね、ありふれた嘘つばちだつてかいてるのよね)と、悪口を言っているのだから。

『宇津保(のるい)、殿うつり。國譲はにくし。』宇津保物語は、俊蔭・女・仲忠・大宮と四代にわたる琴の家伝を主題とする中國伝来の伝奇小説である。副主題として貴宮求婚譚(ノヴェル)が添う。その宇津保物語を第二にあげるが、「殿うつり」を「をかし」とし、「國ゆづりはにくし」という。何故であろうか。

先学の指摘のように、「殿うつり」は、「藏間」上中下の別名と思

上卷(1)仲忠は祖父清原俊蔭の三条京極の旧邸を修理。母に奉る。

a 秘藏を開け遺品をとり出す。

b 此の殿造ればそのめぐりにかく世にさかえ給ふ君住み給ひしと

て、皆家造りて来りぬ。」

(2)仲忠、帝(朱雀)より二条大宮の院を賜わる大宮(琴の相伝をうくべき四代目)誕生

中巻 仲忠祖先の遺文を帝に進覽

仲忠父の妻妾達(一条殿二町に住む)を整理することを提言。父の使として一条殿を訪う。

A 寝殿・東対 女三宮

B 北の対 兼雅異母妹

C 西の一の対 更衣(宰相中将女)

D 二の対 いたく時めかし給へる人

E 東の一の対 千蔭大臣妹梅壺御息所

F 二の対 仲頼少将妹

G 南の殿 式部卿宮の中君

下巻 兼雅、家交換を申し出る・仲忠、家臣の近江守の家を贈り、代りは不用という。

仲忠父の放つていた妻妾達の行末の安定を計って、一条殿から開放する。

A ↓三條殿へ。B ↓姉の許へ。

C ↓兄の許へ。E ↓甥の忠乞法師の許へ。

F ↓仲忠の二条院の家へ引きとる。

G ↓三条の東の外に向ひたる小さき家へ後藤女北方に託す。

色好兼雅は、上陽宮ならぬ一条殿に、多勢の妻妾達をかこつて、佯しく住ませていた。誠実な仲忠が、三條へ二人、自身の二条院へ一人、他は、姉、兄、甥と、親身な人々のもとへ身をよせさせ、安

泰な老後が約束された。大量の殿うつり、である。妻妾が去り、空屋敷となった一条殿を、花ざかりに兼雅仲忠父子は訪れて感慨に耽る。

つまり、人物、学識、才幹、見識にすぐれた主人公仲忠が、祖父伝領の京極の宝蔵を開き、京極殿を修理し、母北方に贈り、不行跡な父兼雅の妻妾の始末をつけて、藤原兼雅家をとのえた。齊家である。オーソドックスに慶賀にたえない殿うつり、(母北方の邸、院拝領の自邸、父の妻妾の大量殿うつり)、まことにめでたい巻である。この主題と、その展開を「をかし」と判定したのである。

「國譲はにくし」とは何故か。國譲とは、帝位交替。國譲上中下の主題は、朱雀帝讓位、東宮即位、立太子の経緯である。立太子をめぐって、兼雅女梨壺腹三宮(第二親王)と正頼女藤壺腹一宮とが候補にあがる。兼雅孫の優勢が噂され、正頼は気をもむが、兼雅は、一向に孫三宮を主張する気がない。正頼は人格者で争う気配をみせず、祈願するのみ。愈々三宮立太子の暁には出家し山にこもる覚悟をする。実は立太子をめぐって熾烈な争を展開するのは後宮の二人である。

○東宮の母后は姪の梨壺腹三宮を太子にと切望。兄弟の太政大臣忠雅、右大臣兼雅を語らうが二人は応じない。兼雅は自分の孫を主張しないばかりか、藤壺腹一宮を「その君はもとより天地にうけられて明王と生まれ給へる人なり 彼をさしるひおぼさばいとあしからむ」と反対するしまつ。夫朱雀帝、子の東宮に切望しても、態度が煮えきらぬ。

○藤壺(東宮・後今上女御)は、三宮立太子の噂をきいて、召しに

も応ぜず、里居をつづける。朱雀帝は、今、天下の政務をまかせられるのは左大臣正頼と左大将仲忠二人である。(太政大臣は無能、右大臣兼雅は色好みで不可) その左大臣が、孫の「一宮でなく、梨壺腹の三宮立太子となれば、出仕せず、大君の仁寿殿(朱雀女御)九君あて宮(東宮妃)をもとりこめて参内させぬとなれば、帝も東宮も甚だ困った事態となる、「臥しこもりて女どもとりもちて惑はさむに、人々なむ騒ぐ事あらむ。よし見給へ」と言つて賛成しない。

母后から三宮立太子をせまられた東宮は「青くなり赤くなり物も聞え給はず」漸く「ここに、はたかの人離れてはいと便なく待るに、かかる事侍らば参るべきにも侍らず。さればかの人、幼き者もろ共に生くも死ぬとも山林に入りて侍るばかりにこそは。位なども、顧みむと思ふ人の為にこそはなせ。俄にこれをいたづらになしてはよく共侍るべきとて涙をこぼして立ち給ひぬ」というていたらく。遂に即位後、自身の意志で一宮に決定する。母后に對し、第一皇子である、又、一宮は兼雅もいうように、生れつき皇位につくべき人相をそなえている、と主張すべきであつた。正直なところ、本心をいつて坐を起つた東宮は、藤壺の牽制に屈した、とする。

これが、いやしくも一國の帝位決定に、このような女どもの私的な争ひが大問題となつていいものか、結末も、東宮のあて宮惑溺が、一宮の立太子を実現させたとは、本末顛倒だ。見苦しい、「にくし」と清少納言はいうのであろう。

殊に東宮を牽制し、遂に本望を達した美女あて宮の激しい陰湿な

サロンの文芸活動(V) — 中宮定子サロンの議題 — 物語受容 —

嫉妬攻勢の形成は、漢文芸作家である宇津保物語作者が、得意とするところである。女流物語作家とは異質のクールな目で觀察したユニークな後宮造型であるが、それがリアルであるだけ、十世紀の清少納言らサロンの女房達には好感をもたれなかつたと思われる。つまり、この様な「あて宮」造形も「にくし」であろう。

あて宮は里ごもり中に、東宮がどの後宮を何回召したか、その殿へいつ通つたか、を藏人に尋ねる。梨壺に男宮誕生というのを「あぢきな事やときき給ふ」「あな聞き憎や斯様の事はと聞かぬ様にて物も宣はず」という気の強さ。「あさましう心強き人、例の我こそ負けぬべかんめれ」としばしば帝を歎かせる。「いと恐ろしき人」と太政大臣忠雅、右大将仲忠、東宮に言わせる。この様な女御は、逆境にあつて、叔父道長のいやがらせをうけても春風駘蕩、おほどかにかまえてそぶりにのみせぬ定子中宮に心酔している定子サロンでは、「全くもつて氣にくわぬ女御をもつてきたものだわ」という事になる。

次には、順序は諸本不同であるが、

○埋木 月侍女 ○かたのの少将 梅壺の少将 ○道心す、むる

松か枝 ○こまの、物語 物羨みの中将能本欠かはほりの宮  
人め能本欠とを君前本欠能本欠が「をかし」という。○印風葉和歌集に採歌。何れも散逸物語で、その歌・詞書をよすがに、その物語を推察するより方法がない。(何れも無名草子には採りあげられぬ。)

○うもれ木物語 (中野氏校本風葉和歌集)

いとせちにおもふこと侍けるころうちくもりしくれければ

うまれ木の少將

冬374はれまなき心や空にまかふらん泪しくる、袖のうへかな  
おなじさまなりけるあかつきよめる

うまれ木の少將

恋二900あらはこそ物も思はめいて、いなはやかて消なん命ならずや

あはれな、しみじみとした短編(二首とられているから)の恋物語と思われる。主題、表現を、「をかし」と判定したものであろう。

○かたの物語(中野氏校本風業和歌集)

殿中納言中野氏校本たよりのついでに一よとまりてまたともし侍らざりければ身をなげんとしける所にてうかひをみつめてはかまのこしをひきやりてか、りの松のすみしてかきてかの中納言につたへよとてとらせ侍りける

かたの、大領か女

浪

「かたのはむまのむくるにもおかしそれもよへおと、ひの夜ありしかはこそおかしかりけれ」意味不明、雨中夜がれせず馬のままに女のもとに通つた意か?

一首であるから、「埋れ木」よりも短い短編か。交野の大領の女を主人公とした「あはれ」深い物語か。悲しい恋に悩んで絶望した女主人公が、身を投げようと、重い足どりで河岸につくと、暗黒の空に赤々と燃えさがる篝火が、パチパチと火の粉を散らし、漁師達が掛声あげて鵜飼の最中。虚をつかれて、坐りこんでしまった。袴のこし(紐)の先を少し破りとして、篝火の燃えさしを捨てて書きつける歌。実に斬新で、ローカルカラーに溢れユニークな「あはれ」、主題、場面というわけで、採りあげられたものであ

ろう。

○道心す、むる物語(中野氏校本風業和歌集)

心にかけて侍ける人のふみを七日よそなからみてよみ侍ける

道心す、むる右大臣

秋上21ゆきあひの空迄をこそかけさらめふみたにみはやかさ、きの

橋

秋悲不到貴人心帯といふころを

道心す、むる右大臣君

秋下37いかはかりしつわか身を思はねと人よりもしる秋のかなし

語和漢朗詠集上秋 白氏文集

おほきさいのみやいままたまゐり給はて入道関白のみやにおはしましけるころきこえさせ給ける

道心す、むるの朱雀院御歌

哀傷67いつとなく物おもふ人の衣手にくらへてみはやふちのたもと

を

御返し

672きしま、にくちはてにけるふち衣くらふはかりののこりたになし

しのひて女につかはしける

道心す、むる右大臣

恋一72あはれしる人もあらなんもらさしとつ、む袖よりあまる涙を女のもとにかきつくし侍けれども返事をひとたひもみ侍らて

道心す、むるの中納言

同82なにはかた数ならぬみをつくしてもみつとはかりの一事もかな

思ふ事はへりて石山にまうてはへりけるに山のもみちのいとおも

しろきをみて

道心す、むる右大臣  
五恋<sup>三</sup>もみちはの色はものは涙のみか、る袖こそこさまさり  
けれ  
物思ひけるころしくる、そらをみて

道心す、むる右大臣  
同三 かきくらす空の時雨はしくれかは身よりあまれるよはの涙  
を

風葉和歌集に収める八首からすると、ほぼ、落窪物語くらいの中  
編で、右大臣となった貴公子のかなわぬ恋の物語であるらしい。  
しみじみとした「あはれふかい」心情の歌ばかりである。殊に、  
「秋悲不到貴人心」を題とした一首は、白氏文集第三十五

早ク人<sup>テ</sup>皇城<sup>ニ</sup>贈<sup>ニ</sup>王<sup>ノ</sup>留守<sup>僕</sup>射<sup>ニ</sup>  
津橋残月晚沈沈 風露凄凉<sup>タタケ</sup>禁<sup>ニ</sup>署<sup>深</sup>  
悲愁不<sup>レ</sup>到<sup>二</sup>貴人心<sup>一</sup>

(和漢朗詠集は「城柳宮槐揺落<sup>スレトモ</sup> 秋悲不到貴人心。」清少納  
言の時代には此の白詩は秋悲不<sup>レ</sup>到<sup>二</sup>貴人心<sup>ニ</sup>と朗詠されていたも  
のである。)の、白詩の句によせて自己の感懐を訴えた歌である。  
白氏文集の世界に息づいていた定子サロンでは、大いにうける、  
「をかし」とされる所以である。つまり、あはれな悲恋物語、主人  
公は白詩の世界に生きる人、そのような「道心すすむる物語」を、  
つまり主題、恐らく出家に心惹かれる構想といい、一編の雰囲気と  
いい、「をかし」と判定したものとと思われる。

▲「こまの、物語はふるきかはほりさしいててもていきしかをかし

サロンの文芸活動(Ⅱ) — 中宮定子サロンの議題 物語受容 —

きなり」<sup>前本</sup>「くひものまうけたるそにくき<sup>前本</sup>

こまの、物語はなにはかりおかしき事もなく、ことはもふるめき  
見所おほからねと、月にむかしを思ひいてて虫はみたるかはほりと  
りいて、もとみしこまといひてたつねたるかあはれなるなり」と  
二回にわたって出ている。余程、清少納言には気になる作品である  
らしい。

<sup>a</sup>全体として魅力に乏しい主題、構想平凡  
<sup>b</sup>言語表現が陳腐

こまのいう見せ場、とびきりいいところが少ない。  
月には……のシーンは「をかし」「あはれ」。つまり、主題や構想  
は平凡でも、部分的に一つだけ、すぐれていい見せ場がある。そ  
れが印象的だという。

前本、堺本のみであるが、このシーンは不可という。

▲物羨みの中將さい相にこまませてかたみのきぬなとこひたるそに  
くき<sup>一</sup>  
登場人物の非常識な男の行為を「にくし」と判定。

以上みてきたところから、定子サロンの物語論議は、  
(一)全体として魅力ありや否や。  
(二)主題・構想・心理描写の巧拙、斬新か陳腐か。

(三)場面設定の巧拙。あはれなシーン、見せ場が多いか少いか。自然  
描写の如何。

(四)用語が洗練されているか、否か。陳腐か、否か。下品なことばづ  
かいの有無。

(五)非常識、汚穢、露骨、殘虐、殘忍、無慈悲、醜惡、非情、等は「をかし」とはされぬ。後宮サロンの性質上。

というところであろう。相当高度な批判がなされていたことが推察されるのである。又、それが前掲引用章段にみられるように、しばしばなされていたのである。此の物語愛好、物語への執着というのが、定子の門流に伝わって、曾孫祿子サロンで、前古未曾有の「物語合」がもたれる事となる。